慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小澤蘆庵論
Sub Title	Ozawa Roan
Author	香川, 景松(Kagawa, Kagematsu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1958
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.8, (1958. 10) ,p.1- 15
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00080001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小澤蘆庵論

香川景松

「小澤蘆庵、名ハ玄中（正しくは玄仲、又は玄冲）一ニ觀荷堂ト號ス。平氏、通稱ハ帶刀、尾州ノ人ナリ。古風ヲ唱ヘテ一家ヲ成ス。門人ニ名アル士多其學ヲ傳フ者數人アリ。享和三年（實は元年）七月十一日、歳七十九ニテ歿ス」（「續諸家人物誌」、文政十三年刊）

「小澤玄中ハ姓ハ平氏ニシテ、家ノ號ヲ蘆庵、又觀荷堂ト呼ビ、通稱ヲハ帶刀ト云リ。尾張ノ人ナリ。元竹腰家ノ臣ニテアリシ人ノ子ナリトゾ。故アリテ幼キ時ヨリ大坂ニスミ、年タケテハ京師ニウツリテ、某ノ公ニ仕マツレリ。年三十五ノヨリ任ヲ辭シ、洛東岡崎ニ居ヲシメ、母ヲ尾張ヨリ迎ヘテ、物カク業ヲ營ミトシテ世ヲ送ラレケリ。……冷泉爲村卿ノ門人トナリシガ、見ル所アリテ歌ノ姿カハリテ終ニ其名世ニ轟キヌ。……享和元年七月十一日身マカリヌ。年七十九、北白川、心性寺ニ葬ル。法號叔照院月江蘆庵居士トイフ。」（「古學小傳」安政四年刊）

蘆庵の傳記として「續諸家人物誌」が最も古く、且、簡略である。次いで「續近世叢語」（弘化二年刊）・「近世三十六家集略傳」（嘉永二年刊）・「古學小傳」が出た。「古學小傳」の内容が最も精しい。問題になるのは生國にであるが、「續諸家人物誌」は「尾州ノ人」とあるのみだが、「續近世叢語」以下は尾張の人で、竹腰家（尾張藩の重臣）の家臣の出であることを記してゐる。何を根據として生國を尾張としたか、臆測があるのみで、信ずべき資料が無い。

然るに蘆庵の歌集「六帖詠草」雑の部に、「やまとの宇陀の法正寺へまうでけるとき、たてまつる歌幷序」とあつて、次の序及び歌を殘してゐる。

おほぢの君の身まかりたまひし頃は、かぞの君は二つばかりにやおはしけむ。九つときこえしときより、家名たえて、かなたこなたの國にさすらへたまへるほどに、年月をかさねて、まうでたまへりしこともなかりけんかし。まして、その末の子にうまれ侍れば、この國とはきゝながら、いかなる所、何といふ御寺にや、とし頃なつかしみおもひ奉りし、しるしにやこそさだかにをしふる人のはべりて、うれしくおもひたまふるに、こんとしはもゝとせにあたりたまへり。そのころまうでなんとはおもへど、いとかよわき身の病さへおほく、よはひかたぶきて、その期まちつけたてまつらんことのおぼつかなければ、この春まうで侍るになん。……

もゝとせのこけの古墳たづねきてむかへば袖に露ぞみだるゝ

いにしへの小澤の水のあせてかくかれ行末をあはれとはみよ

我だにもなからんのちのふるつかを思へばけふにましてかなしき

これは安永四年春、祖父の百回忌を一年繰上げて、大和宇陀の法正寺の墓に詣で供養した時のことであるが、この序及び歌により、祖父の墓が法正寺にあること、父が幼少の時に祖父は歿し、家名が絶え、諸國を流浪したことが訣る。この外にも蘆庵の書殘したものには尾張との關係は何も出て來ず、彼自身記錄した歌文に大和との關係を語つてゐるのである。生國について、此の様な疑問があるところから、色々臆測がなされたが、近年高濱二郎・中野武氏等の多年に亙る苦心の調査考證によつて、生國その他に關する多くの疑問が解明された。（高濱二郎氏著「小澤蘆庵年譜」・中野武氏著「小澤蘆庵」及び「小澤蘆庵その後の研究」）

高濱氏の法正寺に於ける調査によれば、祖父は大和宇陀郡松山藩織田氏の家臣で小澤十郎兵衞と稱したことが訣る。又父は小澤喜八郎實郡（又は實邦）と言ひ大坂上本町八丁目念佛寺にその墓碑が存することが確かめられた。尙、中野武氏は、京都綾小路通り大宮西入ル坊門町にある、蘆庵の菩提寺であつた聖德寺に於て、蘆庵の母、由佐の墓碑を發見せられたが、その側面に兩親の生國が錄してあつた。父實邦は榮薫と號し、和州宇陀に生れ、後攝州大坂に住し、壽七十二、延享甲子三月二十四日に卒し、大坂念佛寺に葬られた、

とある。母由佐は姓は曾和、攝州大坂に生れ、小澤榮薫に歸し、壽八十七、明和己丑十月四日卒し、聖德寺に葬られたことが訣つた。

これによつて、父は和州宇陀に生れ、「六帖詠草」にある通り家名斷絕し、諸國を流浪したが、後大坂に住み、妻を娶り、大坂で歿したことは、恐らく動かし難い事實であらう。小澤氏の家名が斷絕した理由の詳細は訣らぬが、當時松山藩は士氣頽廢し、延寶八年藩主織田信武が自殺し、封土は削られ、丹波柏原に國替となつた。この間にあつて小澤氏の家名が絕え、諸國を流浪することになつたのではないかと考へられてゐる。

蘆庵は、父五十一歳の時に大坂に生れ、六人の兄姉があり末子であつた。少年時代は大坂で育ち後に京都に上つた。しかし、上京した年月は明らかではないが、京の人、本莊三丞勝命の養子となつた。高濱氏は、本莊三丞は蘆庵の實姉の夫で、元文五年歿したが、嗣がなかつたから、末期養子の緣組をしたのであらうかと考へてをられる。時に蘆庵十八歳であつた。後に母を大坂から迎へ、寶曆七年、舊姓小澤氏に復してゐる。竹腰家の臣の子とする說の根據は前述のやうに明らかにされてゐないが、本莊氏が尾張犬山の竹腰氏の京都留守居役ではなかつたらうかと言ふ說がある。蘆庵が、その生涯の初期に大坂で育ち、十八歳以前のある時期——十八歳に先立つ僅か數年——に京都に出て、後に名を成したといふ事實は興味ある問題で、大坂に育ち後年京都に住んだ上田秋成があることを考へると、この兩者の類似點を注目せねばならぬと久松潛一先生は指摘せられた。そして、出京は蘆庵の生涯を決定づける一つの大きな要素であつた。

蘆庵は若くして歌を學んだと思はれるが、初めの師は誰であつたか訣らぬ。伴蒿蹊・澄月とは壯年の頃から交りがあり、終生變らぬ友情を持ち續け、歌詠の唱和・贈答が多く殘つてゐる。蒿蹊・澄月は共に武者小路家の門人であつた。蘆庵は冷泉爲村の門に入つたがその時期は明確にすることが出來ぬ。併、歌道に專念するやうになつたのには、その動機が考へられる。

寶曆七年、四十三歳の時に鷹司家に仕へた。そして、明和二年鷹司輔平が、東照宮百五十年祭に勅使として下向した時、その供に加つて關東に下つたが、如何なる理由によるか、歸路、江戸に於て俄かに出仕を止められてゐる。「六帖詠草」雜の部に

むかしことにあたりてより、閑人となれば、殘生をこゝろのまゝにやしなひ、火にあひては、うづまさにのがれて、幽閑をたのし

び、病をえては、この岡崎に來りて、我このめる風景にとめるをおもひて

世の中のうきにあはずば心ゆくのべのいほりにすまひせましや

よの中のうきは我身の幸ぞとも命しなくばいかで知らまし

「むかしことにあたりてより」はこの事件を指すものと思ふ。その後、閑人となり、殘生を心のまゝに養ひ——卽、この事件を契機として、世俗の業から離れ歌人として自適の生活に入つたのである。爲村の門人となつたのは、此頃ではないか。自らも歌人として自覺し、作歌に精進したものと思はれる。そして、蘆庵に敎へを乞ふ者が、漸く增え、名聲も擧り、蒿蹊・澄月・慈延と共に平安和歌四天王と呼ばれるやうになつた。

然るに明和八年以後安永二年の間、卽、四十九歲から五十一歲の間に、師爲村から破門されると言ふ事態が起つた。その原因は爲村と歌風が相容れなくなつた事も想像されるが、又同門の人々の間に蘆庵を快く思はぬ者があつて、中傷したことも、事實あつたらしい。そして、師の爲村は安永三年に歿してゐるから、生前和解することなく終つたのである。併、破門されて後に、彼の歌論・歌風の方向が決定して行つたことが思はれる。

更に、生活の上、文學の上で見逃すことの出來ぬ事件は天明八年一月三十日の京の大火である。下立賣にあつた、蘆庵の家も土藏一つ殘すのみで燒失し、一時、下岡崎の滿願寺に移つたが、門人の世話で、二月十三日太秦十輪院の地藏堂に移つた。時に六十六歲であつた。「詠草」によると、此處は十年程住む人もなく荒廢し、雨露を避けるばかりの處で、初めは從者二三人居たが、寂しく、ものおそろしげな樣子に皆去り、年老いた姪一人が薪炭の勞をとつてくれた。殊に冬の刺すが如き寒さは老いの身にしみた。天明七年には都に大飢饉があり、つゞいてこの大火である。太秦の生活の困難も想像に難くない。太秦假寓四年間の生活は、時に都人の訪れもあり、寬政四年春には、文學・藝術の保護者であつた、眞仁法親王が嵯峨の花見の序に、立寄られたこともあつたが、常は孤獨・寂寞たるもので、然も病に冒されたこともあつた。併、この生活の中にあつて、彼の作品中、秀歌と見做すべきものを生み、又歌論「ちりひぢ」「あしかび」「或問」が完成したことを思へば、蘆庵の生涯中、大きな意義を持つ時期であつたと言へよう。そして寬政四年洛東岡崎

の圖南亭に移り、晩年を過した。

次に、蘆庵と他の歌人との關係の重なものに觸れて置く。既に述べたやうに、伴資芳（蒿蹊）とは壯年時代から親しく交り、終生變らぬ誼を續け蘆庵の友とし、最も深い關係にあつたことは、「六帖詠草」及び蒿蹊の「閑田文草」等に伺はれる。明和五年伴資芳が薙髮し、蒿蹊と名を改めて訪れて來た時の驚きは「詠草」雜の部に見えてゐる。生活の上で相互の影響が考へられるし、又年下の蒿蹊は歌論・歌風に於て蘆庵の感化を蒙つてゐることは否定出來ない。

上田秋成が、羽倉信美に伴はれ、岡崎圖南亭に訪れたのは寛政五年の秋であつた。その時の記事と唱和の歌が「詠草」にあり、その後も、秋成との來往が續き、唱和・贈答の歌が殘されてゐる。狷介な秋成と蘆庵とが交りを深くしたのは興味ある問題で、秋成は「膽大小心錄」で宣長を罵倒してゐるが、蘆庵の歌人としての價値を認めてゐるのは、兩者に通じるものがあつたことが、想像される。

景樹の養父景柄とも親交があつた。景樹が景柄の養子になつた年を寛政七年と推定すると、景樹二十八歳の時である。梅月堂景柄は二條派の地下の宗匠として一家を成してゐたが、歌は蘆庵に及ぶべくもなく、當時の舊派であつた。景樹の歌には梅月堂讓りの、二條流の弛緩したものもあるが、價値ある歌は蘆庵の影響を受け、獨自の歌境を拓いたものである。歌論も蘆庵の歌論に立脚し「調べの說」を展開して行つたのであるから、景樹に與へた、その影響の大きかつたことが考へられる。併、兩者の交渉は蘆庵晩年の數年の間である。從つて、その交渉を語る資料は多いとは言へない。

親しきはなきがあまたになりぬれど惜しとは君を思ひけるかな（桂園一枝）

この歌は、景樹が蘆庵の死を悼んで詠んだものである。この歌から吾々の受ける印象は死を痛切に悲しんでゐるとは感じられない。殊に、下句「惜しとは君を思ひけるかな」は、寧、空々しい感じを與へる。併、景樹として蘆庵の死を、さうした感情でゐられた筈はなかつたのである。これは歌に缺點があるので、景樹は胸に迫る痛切な思ひ、感慨無量と言ふべき時に、此のやうな表現をして了ふ癖があるのだ。

兩者の關係は「六帖詠草」、「桂園聚葉」、景樹の記した「神方升子の詠草の奥書」、「桂園一枝講義」等によつて伺へる。

己れいと若かりし昔、ある元日のあした、爐邊によりて

年こえて今はとたゆむねぶりこそ先づ怠の始成けれ

とよみ捨しを蘆庵後に聞きつたへて

たゆみぬと思ふぞやがて行末の身のおこたらぬはじめ成べき

とよみて贈られたりき。此事を此頃川崎吉福ぬし聞出で、書いつくれよと云へるに仕せたるなり。さてかく書いつくるまに〳〵いとはかなくも、なつかしき懷舊の情にたえず

老ひにけりつひに心のおそうまにむちうたれつゝかひもなくして（桂園聚葉）

又、

己れいと若き時、ある夜小澤蘆庵の許にまかりて物語せしうち、かの翁曰く、そなたは才の走りすぐるが患なりなど、其外も心得申聞けられ、翌日ついでありて

千里をもかけれと鞭はうちながらあはれとみらんしこのおそうま

と申遣したる、かへし

鞭うつは海をこえよと思ひきやあな〳〵あやぶしこのはやうま

と申し來り候。此諫大に感心いたし候て、其心得もはらに候ひし。老ひて見候へば殊更添き教誡に侍りし。（詠草奥書）

いづれも晩年、蘆庵を追想して記したものであるが、蘆庵から歌の上の教誡を受けてゐた一端を示すものであると共に深い追慕の情を現してゐる。又「桂園一枝講義」（晩年景樹が「桂園一枝」の歌を自註したもの）によると、「この里は花ちりたりととぶ蝶のいそくかたにも風やふくらん」と言ふ歌を詠んだ時、當座題の他の歌と共に横山直右衛門なる者が、蘆庵に示したところ、甚だ譽め、此やうに揃つてよいのは五六百年もあるまい、と言つたといふ。

尙、中野氏は自筆本「六帖詠草（藻）」系統の諸本を渉獵して次の資料を明らかにされた。

よべゆたにさぶらひ侍て、御おしへごとゞもかず〳〵うけ給り、いと〳〵かたじけなくなむ。さればかのおこたりの心をこしてや侍らん

君がいさめ聞きてかへらひふつくゑにふつくみて夜を明しつるかな

千里をもかけれとむちは打ちながらあはれとみらんしこのおそこま（景樹）

初のうた一首のしたては、ふづくみてこそよをあかしつれと云て、かなと置くべき歌にあらず。かへらひの詞ふるくいひたるは、すこしつかひざまたがひたる樣也。其義しばらくおく。ふづくみては恚の字又は啄嘲の字をよませていかることなり。いさめられてはらだちあかしつるとあるべし。後のうた自他わかちがたし。人のむちなれば、あはれやと思ふとあるべし。自らのむちならば、むちはうちつれどいかゞはせまし、とあるべし。（蘆庵）

又、

いとくらき道てらせればともし火のかげばかりだにうれしきものを（景樹）

下の句にて見れば道てらせるは誠の火にあらず。さるをかくいへば、一ツともし火にてらすとみゆ。くらき道てらしつる哉とあらば、下の句と別になりて一意とほるべし。すべて實地をふみてよまるべし。

むちうつは海をこえよと思ひきやあな〳〵あやふしこの早駒（蘆庵）

これによつて、前述の蘆庵の教誡が如何なるものであつたかゞ精しく訣る。彼は景樹の歌才を認め、その生長を期待すると共に、忌憚なくその歌を批判し、教を垂れてゐる。形式的な師弟關係の有無は問題ではない。景樹は梅月堂の養子であるから、門人の列に入らぬは當然である。形式的師弟關係は無かつたにしても、彼の生前、短期間ではあるが景樹は親しく接し、その教へが景樹の若い心に深い感銘を與へたことは充分察せられる。

蘆庵に關する逸話は諸書に散見し、逸話によつて、彼の人柄・性格が色々想像されてゐるが、どの程度事實に近いか明らかにされな

いものが多い。併、馬琴の「兎園會集說」の記事は、馬琴の曲筆もあらうが、注目すべき點を含んでゐる。蒲生君平が、「山陵志」を表さむ志を持つて京に上つた時、蘆庵を訪れたが、彼は君平の志を喜び家に泊めた。ある日、君平、等持院の足利尊氏の墓を見て、恨み心頭に起り、尊氏を罵り杖をもつて思ひのまゝ墓を打ち叩き、夜更けに歸宅してこの由を蘆庵に語ると、「われもまた、いぬる年、ある日靈山のほとりへ逍遙して、長嘯の墓所を過りしとき、さすが宿恨なきにあらねば、ゆきも得やらず、にらまへて、長嘯子不滅の罪あり。和ぬしみづからこれを知るや、和ぬし豐太閤の外族とて、位高く且采地も廣かるに、心さま武士に似ず、伏見の籠城に敵の旗色を見て鬼胎を抱き、鳥居元忠等を棄殺しにせしは不義也。事たひらぎ罪を蒙り、わづかに命を助けられしを幸ひにして、恥を知らず、心にもあらぬ世捨人貌して、ゑせ歌多く詠じたる、一盲衆盲を引きしより、歌のしらべわろくなりて、今に至るまでなほらぬは、これ不滅の罪にあらずや。冥罰かくの如くならんと罵りながら杖をあげて、墓を毆りたる事ありけり。……」と。

「詠草」にも、君平が訪れたことが見える。折口信夫先生は、「近代短歌」に於て

「……長嘯に何らかの關心が此傳へにすら見えて居るのはおもしろい。長嘯を憎んだといふ說明は、馬琴の誤傳か、曲解かも知れぬ。單に歌風の違ひの上からでは、ありさうでもあり、ありさうでもなく考へられる。何れにしても、隱士風の歌よみとして、長嘯・蘆庵の間、かうした交涉の傳へられるのは、意味のあることである。」

蘆庵は確かに隱者風な生活態度を持し、隱者風な歌を詠んでゐる。この傳は、さうした長嘯に持つた彼の關心と、彼の氣質を見せてゐる點で興味が深い。

蘆庵の學識は歌論「布留の中道」によつて伺へるが、彼が多くの歌集を類集校合し、中には今日傳本の極めて稀なるものを含んでゐると言ふ事實を考へると、その學識の深さが感じられる。彼の漢學の師は明らかにし得ないが、菅茶山は、その隨筆「筆のすさび」で和歌・漢學共に勝れてゐた事を認めてゐる。「或問」に「我朝漢土萬里をへだてゝ、人情一般なる證少々可記之」と言つて毛詩と萬葉の歌の心の通ふものを、合せる試みをしてゐる。折口先生はこれに就いて、「學問の眼と、詩の心が相叶うてゐる自在さが流れてゐる。さうして、漢學を以て日本を說かうとしてゐるやうな、寧、如何にも海表の學問の方に達してゐたことの思はれる小澤蘆庵の詞であ

る。」と述べられた。歌學と漢土の學が豐かに調和したところに、彼の學問の廣さがあつた。「たゞこと歌」を唱へながらも、凡俗・安易に流れなかつたのは、やはり、根底に學問の力があつたからである。

蘆庵の歌論書は、「ふりわけ髪」・「ちりひぢ」・「あしかび」・「或問」がある。「ふりわけ髪」は寛政八年刑行された。「ちりひぢ」・「あしかび」・「或問」は既述の如く太秦在住、寛政二年に成り、「布留の中道」と言う標題で一つに纒め出版したのは、寛政十二年であつた。「ふりわけ髪」の前半は歌論で初心者に理解させる爲、啓蒙的に書いたもの、後半は「詞のはたらき」・「てにをは」等に就いて記したものである。

彼の歌論として重要な意義を持つものは、「布留の中道」である。先、「ちりひぢ」に於て、歌に關する、基本的見解を述べ、歌を作る者が何處に心構を置くかを說いてゐる。「うたもと法なし。」「歌もと師なし。むかし師なき世によき歌あまたあり。」「そのいま思ふところを、一句にも、二句にもいふ、これ歌なり。……彼の一言二言の心を三十一字にのべて詠之、更に別物にあらず。此一言の外更にいふべきことなし。」又「……されば我心にさきだつものなし。人にならひてよまず。作例によりてよまず。是無法無師なり。」と。これは歌に關する彼の根本思想を述べてゐるのであるが、このやうに、歌は「無法無師」であり、「我が心に先立つものなし」と言う提言は、必ずしも彼の獨創ではなく、眞淵の到達した思想と根底には通じるものを持つてゐる。

「しかはあれど、我鈍根愚昧なれば、その昔人のよみおけるあとを見てよまばやと思ふ。是は第二義なり。」第二義に於て眞淵と著しい相違を生じて來る。蘆庵は、日本紀・萬葉の歌は喜怒哀樂の動くところを現すをむねとして、詞の善惡によらないのが尊いとし、末世の詞であつても此の心を以て詠ずれば則古風である。今、萬葉をむねとする人は、此の古詞を知るを要として、今の俗の心をもとめて詠ずるが故に、詞古くとも賞するところの古風ではなく、詞は萬葉で、心は流俗の新風であるとしてゐる。これは明らかに眞淵一派の萬葉ぶりを非難してゐるのである。然らば彼は歌の軌範を何に求めたかと言へば、古今集であり、貫之であつた。古今集を尊んだ理由は彼が冷泉爲村の門から出たと言ふだけでなく、當時の歌人が古今集に感じてゐた權威の根强さを考へねばならぬ。彼の作品から

受ける感じは貫之の歌風より、寧、よみ人知らずの歌風に、よさを感じてゐたやうである。さうして、古今集全體に好さを擴充して感じ、古今集全體に權威を感じて來たのだと思はれる。一方、未だ勢力を持つてゐた、傳受・口傳を尊ぶ二條・冷泉の末流を排斥した。そして、彼が生涯をかけて到達した歌論が「たゞこと歌」の主張であつた。

「歌はこのくにおのづからなるみちなれば、よまむずるやう、かしこからんとも思はず、けだかからんとも思はず、おもしろからんとも、やさしからんとも、めづらしからんとも、すべてもとめて思はず。自然の道なるが故に、求むれば自然をうしなふ。たゞいまおもへることを、わがいはるゝ詞もて、ことわり聞ゆるやうに、いひいづるこれをうたとはいふなり。」

これが、「たゞこと歌」の根本的觀念である。「たゞこと歌」と言ふ語は、古今集の序にあることは言ふまでもないが、序の歌の六義の第五の解説文全體から暗示を受け、彼自身の理解によつて「たゞこと歌」の説を展開させて行つたのである。

「或問」に、あまり、たゞありでは面白くないから、ひとふし面白さうな心を、このたゞ言で詠んだら如何、との問に對して

「答云、其心大にあやまてり……わが思へることを、いひいづるは内心よりいづ。さるを面白かるべき一ふしをいはんと云は、人のいまだ詠ぜざる心をもとめて詠ぜよといふ教にたがへることなし。……今おもへる所たゞ言につゞけならひ、誰聞きても聞ゆるやうに修練つもりて後は、いかなる事も、詞心にまかせて自在なるべし。」と言つてゐる。

極力作爲を排し、古語になづまず、平易な言葉を以つて、自然に、眞實を求めて歌を詠まうとしたのである。歌の本質に觸れてゐる點から見て正しいが、今日から考へれば、啓蒙的な歌論ではある。併、時代を考へて見ねばならぬ。眞淵の新風が唱へられ幾許もない時である。傳受・口傳を尊重した、堂上派が未だ勢力を持續してゐた、傳統の根强い京都に於て、斷乎、このやうな新説を唱へたことは、彼の歌に持つてゐた信念の强さと、歌に潛めた情熱の深さを感じない訣には行かぬ。

然らば「たゞこと歌」とは實作上、どんな歌を言ふか。歌の價値の善し惡しは別として、彼自身が「たゞこと歌」の中でも「たゞこと歌」と考へたものを擧げておく。

わづかなる雲まそひつゝあまつ風まちし袂に今宵吹くなり

世人などやかくたゞごとならんと、わらはんかし（六帖詠草、夏）

又、

仲秋十日より三日ばかり、夜々月明なり。京の人はこのほど、とへどおもへど、こずあり〳〵て、くもれるよもやくらむかし。例のたゞごとに

くずかづらくる人なしにけふもまた夕日かくるゝ山陰の庭

うす墨にかけるもじすら老のめにみゆばかりなる秋の夜の月

ふくろふの聲の外なるおとづれや月にすみぬる軒の松かぜ（六帖詠草、秋）

尙、蘆庵は歌が成立する基本條件である人情――感情――について、同情・新情の說を說いた。卽、歌に於て人間自然の情が萬人に感動を與へるのは、東西古今人情一般である故に共感を呼ぶので、これを同情と名付けて、人間に普遍する感情を考へ、それと同時に、時々刻々移りゆく情が、ものに觸れ、新しく發するところに人間感情の常に新鮮であることを考へ新情と名付けたのである。

この同情・新情の說は、佐々木信綱博士が、「日本歌學史」で指摘されたやうに、靈元天皇第二皇子、有栖川宮職仁親王の說から暗示を受けてゐるらしく、又先に述べた歌論のある部分は、武者小路實陰の門人似雲の「寄歌述懷百首」の中にその先蹤を見ることが出來る。

蘆庵の歌論は前述のやうに、第二義に於て眞淵の歌論の缺點を衝き、否定的立場をとつたが、第一義的には根底に通じるところがあるのだから、眞淵の歌論が彼を刺戟し、暗示を與へたことは、兩者の立場が如何に對立的であつても、考へられることである。又一方、堂上派の先人の中にも、右のやうに新時代の胎動を早くも感じとつてゐた人があつたのである。傳統の力の强い京都に於て、新風の擡頭は、眞淵のゐた江戸よりも遲れてゐた。新しい歌論・歌風が出現しさうな氣配は京都の歌人の中にも動き出してゐたが、それが、如何なるものか、誰も握み得ず、摸索してゐたのである。豐かな學識と、歌に潛める情熱の深さを持つてゐた蘆庵は、新時代の啓示を敏感に捕へ、人々が無自覺のうちに望んでゐたものを明確にし、新しい道を拓いて行つたのであつた。この道に多くの歌人が從つ

たのも當然であつたらう。

そして、蘆庵の歌論は景樹に繼承され、「調べの說」に發展し、景樹を通じ大隈言道の歌論の中に生かされたのである。又歌風の上で、蘆庵・景樹と無緣に見える橘曙覽は「麗爐裡譚」に

「小澤蘆庵翁の歌に『いにしへは大根はじかみ韮茄子瓜のたぐひも歌によみけり』といへるは、歌むげに狹くとりなし、古き集なども例ある物の外には、題もたはやすくものせず。なべて海月なす筋も骨もなきものに、讀みそこなひ來れる惡癖を看破せられたるものにぞあるべき。……」と言つてゐるが、少くとも曙覽の歌の上の信念の一部には、蘆庵によつて眼を開かされたものがあつたと言つて差支なからう。

太秦にひとりながめて

太秦の　深き林をひゞき來る　風の音すごき秋の夕暮

山風はやゝをさまりて、立つ霧に　林も見えぬ秋の夕暮

蘆庵が天明八年一月三十日の大火で燒出され、二月十三日太秦の十輪院地藏堂に移り、寛政四年三月岡崎圖南亭に移るまで太秦に住んでゐたことは既に述べた。この歌は六十六歳から七十歳の間に作られたものである。孤獨に堪へ、病に冒されながらも、歌の上では成熟した時期であつた。第一首「太秦の深き林を　ひゞきくる風の音」と言う部分は、彼の把握力――受けた印象を、深く心に留め、それを的確に表現する力――が强かつたことが訣り、吾々の心を打つものを持つてゐる。荒れ果てた十輪院の地藏堂で、深い林を響かせて吹き渡つて來る風の音を、獨、耳に聞く思ひに誘はれる。「すごき秋の夕暮」を改めれば、現代短歌の價値評價にも堪へ得るものである。しかし、この部分は詞として傳統があつた。卽、西行の歌「古畑の岨(そば)の　立木にゐる鳩の　友よぶ聲のすごき夕暮」がある。しかし、それを彼は彼なりに生かしてゐると言へよう。從つて當時の歌として咎め立てする必要はないのである。第二首は、第一首より幾らか時間の經過した後の歌で、吹き荒れてゐた山風が、やゝをさまつて夕霧がたちこめ、林が見えずなつた靜寂さを素直に表現し

てゐる。二首とも説明を要しない、訣り易い歌で「たゞこと歌」の主張から言つて、かういふ歌は出て來なければならぬ。そして、彼の作品の中にあつて優れた部に入れて、よいであらう。併、この程度――殊に第一首は力量が感じられる――まで行つた歌は少いのである。

同じく、太秦で「秋の暮」と言う語を第五句に据ゑて詠んだ歌

遠山は　入日のなごりなほ見えて、野は霧わたる秋の夕暮
を花のみほのかに見えて、霧わたる　山田のくろの秋の夕暮
飛ぶ鳥の　行くかた遠く見おくれば、霧にかくるゝ秋の夕暮

先の二首に較べると敍景歌として強く訴へるものはない。三首とも共通した、觸れるところの淡い歌で、靜かな情趣と、それに相應した調子を持つてゐる。「たゞこと歌」の特徴を見せてゐるが、先の二首には劣つてゐる。

ほの見ゆる　かげも青みて、若葉さすかへでの稍　月もを暗き
夏の野に　露をもとめて飛ぶ蝶の　つばさに見るも　暑き日の影
日かげさす　かたへは消えて、軒たかき屋かげに殘る　霜の寒けさ

第一首、當時の歌としては、新鮮な感覺を持つてゐる點に見るべきものがある。併、細かく描寫してゐるが、彼の歌としてはすつきり印象が入つて來ない恨みがある。第二首「つばさに見るも　暑き日の影」に、はつきりした實感を出してをり、「實地について詠め」と言ふ彼の趣旨に叶つてゐる。第三首「かたへは消えて」は事實に卽しすぎ、説明に墮して、第三句以下の霜の寒さを感じさせる迫力を削いでゐるが、第三句以下に寫生の力が生きてゐる。いづれも、當代の歌としては、寫實性があり、感覺の新鮮さがあつて、蘆庵の力量を見せてゐる。

大堰川　月と花との　おぼろ夜に、ひとり霞まぬ浪の音かな

明和三年、四十四歳の頃の歌で、當時評判になり、蘆庵の名聲が頓みに擧つたと言ふ。この歌によつて時代の嗜好が訣る。一首全體

が優雅で、言語に輕い機智があり、調子に拘泥がない。しかも、類型を踏へてゐるところに、人々に受入れられ易い安易さがあつたのだ。「ひとり霞まぬ浪の音かな」は今日から觀れば、つまらぬ機智だが時代の嗜好であつた。かう言ふ傾向は景樹にも引繼がれた。

春の日の　ゆた野の原に　遊ぶ糸の、いつくるべくも見えぬ　空かな

天明初期の歌と推定されてゐるが、この歌などは、假に「桂園一枝」に入つてをれば、景樹の歌として誰も疑はぬであらう。「いつくるべくも見えぬ　空かな」の長閑な調子は景樹の好んで用ゐた調子である。この二首は景樹の歌に、蘆庵から得て來たものがあることを、明瞭に見せてゐる。勿論、かう言ふ傾向の歌ばかりではない。蘆庵の歌全體からの影響も考へられるのである。そして、景樹自身が「六帖詠草」から百六十三首を選んだ「蘆庵翁六帖詠草摘英」に、この二首が入つてゐるのは、當然であると思ふ。

次に蘆庵の特徴を見せてゐる歌、新鮮さを持つてゐる歌を擧げて置く。

一筋の霞のうちや、久世　桂　梅津　大堰のあたりなるらん

霞わけて今か落つらし。夕雲雀　はるかに聞きし聲の近づく

水無月の照る日も　さすが　かげろふの夕さり來れば、風ぞ涼しき

水無月の照る日に涸れて、踏み渡る　さゞれも暑き夏の山川

水無月の　照りはたゝける日盛に、野べゆく人や　あはれ旅人

賤の女が門の干し瓜　取り入れよ。風ゆふだちて、雨こぼれ來ぬ

落ち激ぎつ　岩瀬の音にあらそひて、山下とよみ　蟬ぞ鳴くなる

夏深き　雨のなごりの夕べより、秋のけしきの　薄霧の山

きりぎりす　鳴く夕かげの山風に、よわりそめぬる蜩の聲

月ひとり　天にかゝりて、あら金の土もとほれと　照る光かな

冬の日のほどなき空に　幾度か　今日もしぐれて、暮るゝ　山陰

歌集「六帖詠草」は、門人小川萍流の跋によると、蘆庵が書き留めて置いた歌、萬を數へ五十卷に及んだが、その中約二千首を選んで柏原の城主織田信憑に贈つたもので、刊行に際しては信憑が序を書いてゐる。織田氏は既述の通り、小澤氏父祖の藩主である。刊行は文化八年である。「六帖詠草」と名付けたのは、蘆庵が紀氏の六帖の躰を常に心かけてゐたのによつたと萍流は述べてゐる。この「詠草」の母體となつたものは、丸山季夫氏の御好意により披見したが、「自筆本六帖詠草（藻）」として、靜嘉堂文庫に現存し、四十七册、歌數一萬數千首に及んでゐる。尙その寫しである、藤島本、宮內廳本等が存在する。

蘆庵はその生涯に於て、このやうに多數の歌を殘した。彼は多作することが、歌修業上の意義あることゝ考へ、一つの信念になつてゐた。「たゞ輕情もて首尾てにはをあはせて、いくらもよみならひ修業すること、多年にして此所自在にたしかならば、修業萬般なり。」と「或問」で述べてゐる。景樹も「歌日記」に彼に比敵する歌數を殘しゐることは、彼の信念を承け繼いでゐると思はれる。蘆庵は多作することによつて、歌の自在を信じ、自らも自在に歌を作り得る境地に到つたといふ自信を持つてゐたのである。「詠草」の阿彌陀佛に奉る折句三十二首、藥師佛に奉る沓冠折句の旋頭歌十六首、短歌十二首、雙六歌十五首は信仰のため、又好事の文學的遊戯であるにしても、歌の自在に作り得る自信の程を見せてゐるのである。

折口先生は「……蘆庵の作物に出て來るものは、彼以前の古今を祖述する者の歌風にはないものであつた。彼以前の古今集風の歌が既に知識風なものになつてゐた。彼は拘泥を救ふものとして、多作の方針をとつて居た。蘆庵の後に起る桂園風の歌は、實は蘆庵自身によつて、凡調べ出されて居たものであつた。」と。この先生の詞は彼の多作の方針が持つ意義を明らかにされてゐるのである。

要するに、蘆庵の歌は縣居派に對抗して、京都に新風を興す先觸れとなつたもので、それは桂園派に受け繼がれ、又蓮月・言道の歌を生んだ。從つて、短歌史の上から觀て、彼の存在は見逃すことの出來ぬ意義があることを認めねばならぬのである。